



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	山本多助筆録アイヌ語樺太方言テキスト(1) : 「カラフト・ウベベケレ (オプケ ネワ イコロ ウペペケレ) 」
Author(s)	阪口, 諒; SAKAGUCHI, Ryo
Citation	北方人文研究, 12, 111-121
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73546
Type	departmental bulletin paper
File Information	12_21_Sakaguchi.pdf



山本多助筆録アイヌ語樺太方言テキスト(1) —「カラフト・ウベベケレ (オペケ ネワ イコロ ウペペケレ)」—

阪口 諒

(千葉大学大学院人文公共学府博士前期課程)

要旨

本稿で訳註を行った物語はアイヌ語で書かれた雑誌『アイヌ・モシリ』に掲載されているものである。語り手の木村ウサルシマ氏 (? ~ 1953?) は当時の樺太相浜に生まれた樺太アイヌであり、筆録者の山本多助氏 (1904 ~ 1993) は釧路で生まれ育った北海道アイヌである。山本氏によるアイヌ語の筆録はアイヌ人によるアイヌ語の記録としてだけでなく、アイヌ語釧路方言話者が樺太方言を書きとったものとしても注目すべきものである。これまで山本氏のアイヌ語を検討したものは少ないが、山本氏の筆録資料はかなりの程度語り手のアイヌ語を反映した記述であるといえることができる。この物語の内容はいわゆる烏呑み爺譚であり、アイヌや日本の物語に広く見られるものである。原文はカタカナ表記のアイヌ語のみであるが、本稿ではそれと合わせてローマ字表記のアイヌ語、日本語訳を付している。

「樺太のお話 (おならと宝物のお話)」

川上の者と川下の者がいた。ある日、川下の者が薪を取りにいき、スズメを捕まえて飲みこんだ。家に帰って「カニトント カニトント シペチャララ プユユップッ」というおならをした。すると宝物が出て家いっぱいになった。川下の者が成功したのを見て、川上の者が同じく薪採りに行った。大きな鳥を取って飲みこんだ。「クンクミ クンクミ チニトゥ イムカラ ノイフンムカラ トンパラパラ プッ」とおならをすると、家中が糞だらけとなった。川下の者が見に行くと、川上の者が糞に埋もれていた。「スーマウマウ スーマウマウ アトゥ イソー クルカ エラピス ラピス スーマウマウ スーマウマウ モシリ クルカ エラピス ラピス」と川下の者が祈ると、糞はなくなって川上の者は動くことができた。

1. はじめに

本稿では、山本多助氏が筆録した樺太アイヌ¹⁾の物語を取り上げる。この物語はすでに浦田編 (1998:118-120) で公刊されているものであるが、日本語訳はなされていないため、カタカナの原文に日本語訳・註釈を加えることにした。いまだに不明箇所も残っており、編者の訳註が不十分であることは承知しているが、山本多助氏によるアイヌ語の筆録はアイヌ人によるアイヌ語の記録としても特筆すべきものであり、あえて取り上げることにした。物語の語彙などから見て、山本氏の言葉が反映されていると思われる部分も散見されるが、かなりの程度、語り手である木村ウサルシマ氏の言葉を反映しているように思われる。

1) 民族名称に関しては北海道アイヌとの歴史的・文化的な差異を考慮して樺太アイヌとし、その言語はアイヌ語樺太方言とする。

2. 筆録者について

本稿で紹介する物語は、釧路春採で生まれ育ちアイヌ文化の保存・伝承に尽くし、著述家としても活躍した山本多助氏(1904~1993)が筆録したものである。山本氏はアイヌ語母語話者であったと考えられる²⁾。山本氏の経歴や著作一覧は既に松本編(2005:167-201, 205)で詳しく触れられている。本稿で紹介する「カラフト・ウベベケレ」は1937(昭和12)年2月³⁾に採録されたものである。松本編(2005:155)によれば、山本氏は1936年10月20日~37年2月20日まで当時の樺太に滞在していたので、その間に採録したのだと考えられる。山本氏が北海道に戻ってから、この物語の語り手である木村ウサルシマ氏とは手紙のやり取りを行っており、その手紙が浦田編(1998:253-254, 573)に収録されている。浦田編(1998)に未収録の樺太の伝承は田村(2009)で見ることができる。

3. 語り手について

語り手は樺太の相浜出身で1937年当時は白浜に居住していた木村ウサルシマ氏である。北海道教育庁生涯学習部文化課編(2003:33)には、1953年に71歳で亡くなったとある。木村氏は博識で知られ、知里真志保氏や山本祐弘氏、和田文治郎氏をはじめとした研究者にも協力しており、その語りは知里(1973a~c)などに収録されている。知里氏の辞典には相浜で採録された語彙がいくつか収録されているが、それらは木村氏から採録した可能性が高い。例えば、「esirasiraxku 昔話(tu-itax)の中で‘大きなクマ’を言う《S.—アイハマ》」(【動物編】157)のように物語で使われる語彙が見られるが(浦田編(1998:18)にも「エシラシラ」が見られる)、このことも木村氏からの情報であることを裏付けているように思われる。

4. テキスト紹介

4.1. テキストの概要

この物語は、日本民話において、「烏呑み爺」として知られるタイプの物語であり、「尻ひり爺(竹切り爺)」とも類似している。この物語の梗概はすでに稲田・小澤編(1989)に掲載されている。筆者の解釈と異なる場所も存在するが(「鍋」ではなく「糞」と解釈すべきだろう)、今回の訳註に当たって参考にしたので、以下にその全てを掲載する。なお、この梗概の執筆者は書かれていないものの、稲田・小澤編(1989)の編集に協力していたアイヌ語学者の浅井亨氏だと思われる。なお、以下の梗概は「アイヌ・モシリ」3号から作成されたことになっているが、正しくは5号である。

昔、年上の川上の夫婦と年下の川下の夫婦とが隣あって住んでいた。ある日、川下の者が薪を取りにいき、捕えた小鳥の尻尾をさげると、「カニトント、カニトント、シベチャララ、プュッピッ」とおならをして、そのたびに宝物が出て家いっぱいになる。川上の者が大きな鳥を取って帰ると、「クンクミ、クンクミ、チニトウイムカラ、ノイフンムカ

2) 浦田編(1998)に収録の山本氏がアイヌ語で執筆した文章からもそう判断できる。文法的に説明できない例があるものの、全体として韻文的な表現も見られアイヌ語の豊かな知識が伺える。山本氏のアイヌ語に関しては阪口(近刊)でも若干触れている。

3) 「アイヌ・モシリ」5号では「昭和十一・二月 雪の夜」(浦田編1998:120)とあるが、同じ物語が掲載されている14号では「昭和十二年二月 ウパシ・アント」(浦田編1998:361)とあり、採録年が1年ずれている。ここでは松本編(2005:155)の記述との整合性から1937(昭和12)年2月に採録されたと判断した。

ラ、トンパラパラ」とおならをして、家中が鍋だらけとなる。川下の者が「スーマウマウ、スーマウマウ、アトウイ、ソウ、クルカ、エラピス・ラピス、スーマウマウ、スーマウマウ、モシリ、クルカ、エラピス・ラピス」と祈ると、鍋はみな消え失せた。(稲田・小澤編 1989:58-59)

タイトルは「カラフト・ウベベケレ」(これは山本氏の言葉であろうか)だが、内容からこの話はトゥイタハ tuytah に属するものだと考えられる。おそらく節を変えて語られたであろう挿入歌も存在している(「アイヌ・モシリ」14号ではこの部分のみひらがなで書かれている)。権太での類話には村崎編訳(2001:200-205)「27. ohke tuytah おならの話」がある。尻の音も“kaani tuntu siipe carara puuyu yuu”であり、本話の「カニトント カニトント シペチャララ プユユップツ」と良く似ている。そして、糞を消すための祈りも「スーマウマウ…」と“atuy peci raari raari, sii maw ’asin, sii maw ’asin”で似ている。ただし、浅井タケ氏の話では虫を飲み込むことになっており結末も若干異なっている。鳥を飲み込む話は幌別・静内・十勝・白糠など北海道各地で採録されている。内容に関して詳しくは取り上げないが、参考に北海道で採録された「鳥飲み爺」をあげておく(表1)。

表1. 北海道アイヌの口承文芸における「鳥飲み爺」一覧

番号	題名	語り手(地域)	採録年	出典	捕捉
①	「一 バナンベ放屁譚」	(金成マツ、幌別) 1875~1961	(1940)	知里(1973a:8-13)、語り手は蓮池(1987:47)参照	
②	「腹のなかの小鳥」	不明	不明	金田一・荒木田(1943:165-178)	
③	「説話篇」<17>	山田隆(伏古) 1917~?	1925	吉田(1955:113)、生年は北海道教育庁生涯学習部文化課編(1996:6)より	→類話⑥
④	「説話篇」<30>	山川強(マ) (伏古) 1914~1988	(1925) 類話⑦より	吉田(1955:116)	→類話⑦
⑤	「シャム・ウエベケレ(和人昔話)」[5]	山田徳次郎(毛根) 1895年頃~	1908	吉田(1957:86)、生年は吉田(1911:398)より推測	
⑥	「シャム・ウエベケレ(和人昔話)」[13]	山田隆(伏古) 1917~?	1925	吉田(1957:88)	
⑦	「シャム・ウエベケレ(和人昔話)」[14]	山川弘(伏古) 1914~1988	1925	吉田(1957:88)	
⑧	「2 バナンベのお腹から小鳥の声が聞こえる」	(赤築サンクル、芽室太) 1858~1939	(1933)	北海道教育庁生涯学習部文化課編(2004:14-17)、採録年は知里(1973a:241)より推測	
⑨	「川下の弟と川上の兄の物語」	四宅ヤエ(白糠) 1904~1980	1968	『四宅ヤエの伝承』刊行会編(2011:214-231)	
⑩	「おなかの小鳥」	虎尾ハル(静内) 1901~1991	1983	志賀(2004:224-225)	

※生没年は特に断らないかぎり『エカシとフチ』編集委員会(1983)によっている。

4.2. テキストの表記

本話は「アイヌ・モシリ」14号の「オブケネワイコロウペベケレ」(浦田編 1998:359-361)と表記に多少の差異があるものの、同一のノートから作成されたものと思われる。この二つのバージョンは清音・濁音の表記以外にも「ス」「シ」の違いなどが見られ、語形を推定する際にも参考になるため、本稿では「アイヌ・モシリ」5号、14号を併記し、それにローマ字表記、日本語訳を付した。

(1) 番号

番号は浦田編(1998)の頁と行番号をあわせたものである。11801は118頁の1行目を表す。ただし、14号は5号と改行部分が異なるため番号はつけていない。

(2) アイヌ語ローマ字表記

服部編 (1964) の樺太方言の表記法を参考としたが、長母音と短母音の区別に関しては、山本氏の筆録ではその書き分けが明確でないという理由から、本稿では長母音と想定されるものも短母音として表記した。樺太方言では、北海道方言にあらわれる音節末の *-p*, *-t*, *-k* が *-h* に対応するとされているが、本話にはチカプ「鳥」やパテク「～だけ」という音節末が *-p*, *-k* で終わる語形が出現する（ッは *-t*, *-h* のどちらを意図しているのか不明である）。これは山本氏が自らの母語であるアイヌ語釧路方言に基づいて記述した可能性もあるので、仮に全て *-h* で統一した。人称接辞は慣例に従い *=* で表記し、弱まった *i=* は *y=* と表記した。

(3) 特殊なカタカナ

特殊なカタカナは以下のように置き換えた。

イ：イェ、ユ：シュ、ㇿ(5号)ヤ(14号)：トウ、ヤ：チャ、ㇿ：チュ

(4) 語形の推定

本文のローマ字表記はカタカナから推定した形であるが、イ段とエ段、シとス⁴⁾、チとツの明確な使い分けは見いだせないので推測される語形に直した。そうしたアイヌ語のカタカナから自然に導き出せないものに関しては、推定形として箱括弧 ([]) に入れて表記した（音節末の子音ッ (*-h*, *-t*), プ (*-p*), ク (*-k*) を *-h* で表記する場合は [] に入れていない）。なお、14号にしかない部分は [] で囲っておいた。

4.3. テキスト

11801 ベンケ・アイヌ キアンネ パンケ・アイヌ ポネイネ、ウソユンワ アン⁵⁾。

ベンケ アイヌ キ アンネ パンケアイヌ ポネイネ ウソユンワ アン

Penke aynu [kiyanne] aynu Panke aynu poneyne⁶⁾ usoyun wa an.

川上の者で年上のものと、川下のもので年下の者が隣り合って住んでいた。

11802 パンカ アン ニナクシュ オマン シネ ハツコウ⁷⁾ ポンチカプ⁸⁾ ライケ

パンカアン ニナクシュ オマン。シネ ハツコウ ポンチカプ ライケ

4) ただし、山本氏自身は使い分けを意識していた可能性がある。山本 (1973:8-9) には糞は「ス」で鍋は「シュ」とある他、鍋鉋「シュアツ」、鍋かぎ「シュニ」、柳は「シュシュ」とある。

5) 知里 (1973b:189) によれば「川下の者 (パンカンクッ) と川上の者 (ペンカンクッ) とは兄弟で、川上の者が弟だという」。

6) poneyne: 北海道方言などで言う poniwne に対応する言葉だろう。【人間編】によると「ponuyne となる地方もある《クツシャロ, シラヌシ》。」(【人間編】482) が poneyne という語形は見あたらない。

7) 山本氏の筆録では「チ」と「ツ」の区別がなされていないが、この語は haciko を意図して書かれたと考えられるのでそのように表記した。

8) 「小さい」は「ハツコウ (haciko)」と表現されており、「ポンチカプ」は pon「小さい」cihak「鳥」ではなく、poncihak「スズメ」だと思われる。参考:「§303 スズメ (6) pón-cikap (ぼんチカプ) [<小さい・鳥>] 《タラントマリ》」(【動物編】183)。

Pankaan nina kusu oman. sine [haciko] poncakah rayke.

川下の (者が) 薪を取りにいき、一羽の小さいスズメを殺した。

- 11803 タタキ タタキ オサニルキ⁹⁾ ニナ サンマヌ。オプケ マヌ。オプケ
タタキ タタキ オサニルキ ニナサン マヌ オプケマヌ。オプケ
tataki tataki osani ruki nina san manu. ohke manu. ohke
叩いて叩いて飲み込んだ (?)。薪取りから帰ってきた。おならをした。おならの
- 11804 ハウ エネ アンマヌ。カニトント カニトント シベチャララ プユユツ＝
ハエ エネ アンマヌ。かにとんと かにとんと しぺ ちゃらら ぷゆゆ ぷつ
haw(hawe?) ene an manu. “kanitonto kanitonto sipecarara puyuyuhpuh”
音はこんだった。「カニトント カニトント シベチャララ プユユップツ」
- 11805 プッ¹⁰⁾ アンペイコロ レンカイニ チソッタ アスン アンベノ チセキタイ
アンペイコロ レンカイニ チソッタ アシン アンベノ チセ・キタイ
[anpene] ikoro [renkayne] cisohta¹¹⁾ [asin] anpeno cisekitay
本当に宝物がいっぱい家に現れて、本当に天井
- 11806 バクノ アン。イソユンコ アンタ カッキ イコロ ヌカラ アネタツカラ
バクノアン。イソユンコ アンタカッキ イコロヌカラ アネタツカラ
pahno an. isoyun ko antakahki(?) ikoro nukara an=etahkara
まであった。外に出ると (不明) 宝物を見るように招待された。
- 11807 アンベニ イルシカ ホシキ コキクンベ¹²⁾ イネトッパルス¹³⁾ パンラ¹⁴⁾ エノカイ¹⁵⁾
アンベニ イルシカ ホシキ コキクンペ イネトッパルシ パンラ エノカイ
[anpene] iruska “hosiki¹⁶⁾ [ku=ki] kun pe in=etohparusi [Panrah] enokay
非常に怒った。「俺が先にしようとしたことを先駆けして。憎い下の者め。あのよう

9) 「オサニルキ」は語義未詳。ただ、ruki とあるので飲み込んだのだと思われるが詳細は分からない。

10) 「アイヌ・モシリ」14号では平仮名で書かれており、節をつけて語られていたことが予想される。

11) cisohta < cise 「家」 ohta 「に」であろう。

12) 「コキクンベ」とあるが、「クキクンベ」だろう。物語の会話文中のみには ku= が出てくるが、ku=, an= をそれぞれ仮に「俺が」「私が」と訳しておいた。

13) 「イネトッパルシカラ 先に嘴をつっこみやがって」(【知里フィールド (6)】123); 「in-etok-par-usi 口をはさんだ」(【知里フィールド (6)】124)。etohparusi < etok 「先」 par 「口」 usi 「～に～を付ける」だろう。前の部分の解釈が ku=ki kun pe であるとすれば、ku=, in= は同じ階層に属するという Sato (1985) の結論とも一致する。

14) Panrah は下の者に対する侮辱の言葉だろうか。「uen panrax」(【知里フィールド (6)】123)。

15) enokay < ene 「あのように」 okay 「ある」だろう。

16) 知里 (1973c:469) によれば、樺太方言では北海道方言の hósiki に当たるものが、hosiki だという。

- 11808 キロホ イテセニカワ アナッテ パンラ ヤア シュッケイ ピエ¹⁷⁾ シュッキ
 キロホ イテセニカワ アナッテ パンラ ヤア シュッケイ ピエ シュッキ
 kiroho iteseni ka wa an¹⁸⁾=ahte [Panrah] [yasohkepihi] suhki
 お前(?)は杓を莫産を織る木から吊るしている。憎い下の者め。お前(?)は食物を
- 11809 ニコモ¹⁹⁾ オロワ アンサンケイ アネシケレカラ パンラ ホシキ アン
 ニコモ オロワ アイサンケ²⁰⁾ アネ シケカラ パンラ ポシキ アンキ
 [nikomoh] orowa an=sanke i(?) [an=esukekara(?)] [Panrah] hosiki an=ki
 棚から出したのを料理している(?)。憎い下の者め。私が先にしようと
- 11901 キクンベエエトッパルス²¹⁾ パンラ イエヌマノ²²⁾ ベンケ カッケマツ²³⁾ パテク
 クンペエエトッパルシ パンラ イエヌマノ ペンケ カツシマツ パテク
 kun pe e=y=etohparusi [Panrah]” [ye]. numano Penke kahkemah(kahsimah) pateh
 したことを先駆けしやがって。下の者め」(と)言った。喜んで(?)上の者の妻だけが
- 11902 イコロ ヌカラ ルシュイ。イコロ ヌカラ クシュ オマン。シネ イコロ
 イコロ ヌカラ ルシュイ イコロ ヌカラ クシュ オマン。シネ イコロ
 ikoro nukara rusuy. ikoro nukara kusu oman. sine ikoro
 宝物を見たがった。宝物を見に行った。宝物をひとつ

17) 和田文次郎氏のノートには「お飯碗 (yasuxkepi 残飯)」(北原編 2013:148)「お鉢 (yasikep 残飯)」(北原編 2014:50)とある。同話者からの他の聞き取り資料に「ヤーソホケ」(【知里フィールド(6)】123)；「jasohkepi」(【知里フィールド(6)】124)とある。同話者の物語の和訳である知里(1973a: 398)には「食物」とある。

18) 同話者の物語である知里(1973a: 398)を参考にすると11808～09のan=は「私」とは解釈できない。日本語関西方言で相手を「自分」と呼ぶのと似たものだろうか。なお、an=に関して知里(1973c: 506)には「樺太では更に一步を進めて三人称の接辞と寧ろ考へたいやうな場合にぶつかる」ともある。

19) 「ni-komox, p(-i) n 棚 (樺太)」(【久保寺辞典】171)。

20) n+sはふつう音韻変化を起こしy+sになる。なぜか5号と14号で違いがある。

21) an=ki kun pe e=y=etohparusiだとすると(e=etohparusiだと意味が通らない)、an=とin=はやはり共起しないとさえそうである。11807でもほぼ同じ言い回しが出てくるが、そこではku=がin=と共起していることから、Sato(1985)で述べられているようにku=, in=とan=, i=は異なる階層に属する可能性がある。なお、これと同じような表現は北海道アイヌの物語にも見られ、例えば知里(1973a: 16-17)には「Panampe, hoshki tashi a-ki kush-ne-p e-i-etushmak! パナンペ、先に俺がしようとしたのに、先がけしやがって」という形で出てくる。註13参照。

22) 11903にも「ヌマノ」が出てくるが、喜んで、というような意味だと考えられる。「イエ」の部分が分からないが、「イエ」と「ヌマノ」を分け、ye numanoと解釈した。

23) 同じ話者の他の物語(浦田編 1998: 260-267)には「カシマツ」「カッケマツ」の両方の語形があらわれる。木村氏の語りとしてはカツシマツ(kahsimah)の方だったかもしれない。Pilsudski. (1990: 51-53)のTuita10にも「kásima」(多古恵のTehkantuki語り)という語彙が見られる。

- 11903 セッパ²⁴⁾ タア パテク アコンデス²⁵⁾ スマノ²⁶⁾ チセオッタ トウラ オマン
セッパ タア パテク アコンデス スマノ チセオッタ トウラ オマン。
sehpa ta pateh [an=konte-si(?)] numano cise ohta tura oman.
切羽、こればかりをもらって喜んで(?) 家に持って帰った。
- 11904 ベンカンコ スカンルシュイ アアア アネタツカラ チキ エホソ イヌ
ペンカンコ スカンルシュイ。アアア アネタツカラ チキ エホソ イヌ
[Penkankuh] nukanrusuy “aaa an=etahkara ciki ehosoinu(?)
上の者はそれを見たがった。「アアア、招待されたなら (不明)
- 11905 オトゥ ヤアワナア エハウエ エハウエ シマ チキ²⁷⁾ クニ シマチキクニ²⁸⁾ ナ
オトゥ ヤアワナア エハウエ エハウエ シマ チキクニ シマチキクニ ナ
otu yawa na” “[e=hawe] [e=hawe] sima ci=ki kuni sima ci=ki kuni” [nah]
じゃないの?」「まて、まて、明日俺がやる、明日俺がやる」と
- 11906 イエマヌ。シマ ニナクシュ オマン ウエホロ²⁹⁾ チカプ ライケ タタキ
イエマヌ。シマニナクシュ オマン。ウエホロチカプ ライケ タタキ
[ye] manu. sima nina kusu oman [wenporo(?)] cikh rayke tataki
言ったとさ。次の日薪取りに行った。とても大きな(?) 鳥を殺して、叩いて
- 11907 タタキ ルキ チセオッタ エク オッケマヌ。クンクミ クンクミ チニ＝
タタキ ルキ チセオッタ エク オブケマヌ。くんくみ くんくみ ちにとい
tataki ruki cise ohta eh ohke manu. “kunkumi kunkumi
叩いて飲み込んだ。家に帰っておならをしたとさ。「クンクミ クンクミ
- 11908 トウイムカラ ノイフンムカラ トンバラバラ オッケ ネアイケ アンペノ ス

24) 「Séhpa. (名) 若い女性用の丸い鉄製の胸飾 (穴が開いたメダルのようなもの; 日本人から購入されている); 剣あるいはサーベルの柄 (つか) の小さな留め金 (柄自体ではない)」(【ロシア語】290) とある。

25) an=konte-si とし、複数標識の -si が付加されていると解釈した。上の者が、下の者とその妻の二人から宝物をもらったということを表すと考えられる。

26) 註 22 参照。

27) チキは ci=ki だと考えられるが、ci= も ku= と同じく会話文に出てくるが、どちらも一人称であると考えられ、二つの形式の意味の差は不明である。

28) 富浜の木村チカマハ氏の物語に「まて、まて。明日だ、明日だ。明日は俺がやる。さわぐな、さわぐな。」(知里 1973b: 158) という川上の者のセリフがある。また、新聞の春日フミ氏の物語に登場する川上の者のセリフにも「まて、まて、明日だ、明日だ。明日はおれがやるぞ!」(知里 1973b: 150) とある。木村ウサルシマ氏の語りを知里真志保が記録したものには「ehaue ehaue あす行くよ」(【知里フィールド (6)】125) とあるが、ehaue は「まて」に相当するのだろうか (文字通りには「お前の声」)。浅井タケ氏のトゥイタハにも「" 'ecihawe 'ecihawe, 'eci'onaha sikewente kusu kayo kusu 'an." (さわぐな、さわぐな、父さんが物を背負って重たいから呼んでるんだよ)」(村崎編訳 2001:204-205) という会話文がある。

29) 「ウエホロ」は何か分からない。wenporo だろうか。

むから のいふん むから とんばらばら ぶっ オブケ ネアイケ アンペノ ス
 cinituymukara noyhun mukara tomparapara [puh] ”ohke [neyayke] anpeno [si]³⁰⁾
 チニトゥイムカラ ノイフンムカラ トンパラパラ)(と)おならをすると、本当に糞

- 11909 パテク エアマンポキ チュイ³¹⁾ アンペノ ストゥンダ オカイ アス シモイエモイ＝
 パテク エアマン。ポキ チュイ アンペノ ス トウンタア オカイ アスマヌ。シモエモイサン
 pateh eamanpoki cuy(?) anpeno [si] tun ta [okay-asi]³²⁾ [manu] simoye MO(?) isan
 ばかり梁の下まで積もった(?)。本当に糞の中にいた[とさ]。動けなかった。

- 11910 サン パンカンコ ホシキラム チセダ オマン インカラネヤ スパテク
 パンカンコ ホシキ ラム チセタ オマン インカラネヤ ス パテク
 [Pankankuh] hoskiram³³⁾ cise ta oman inkara(ha) neya [si] pateh
 下の者が兄の家に行って見ると、糞ばかり

- 11911 アンマヌ。パンカンコ イノニイタク³⁴⁾ マヌ
 アンマヌ。パンカンコ イノニイタク キネマヌ。
 an manu. [Pankankuh] [inonitah] [ki ne³⁵⁾] manu.
 あったとさ。下の者が祈りをあげたとさ。

- 11912 「スーマウマウ³⁶⁾ スーマウマウ アトゥイ ソウ クルカ エラピス・ラピス
 すまう まう すまう まう あれい そくる かえらびすらびす
 “suumawmaw suumawmaw atuy soo kuruka erapisurapisu
 「スーマウマウ スーマウマウ アトゥイ ソウ クルカ エラピス・ラピス

- 12001 スーマウマウ スーマウマウ モシリ クルカ エラピス・ラピス³⁷⁾
 すまう まう すまう まう もしり くる かえらびすらびす
 suumawmaw suumawmaw mosiri kuruka erapisurapisu

30) 「ス」はおならをして出てくるものであり、文字通りに su「鍋」を表すとは考えにくく、si「糞」とした。山本(1973: 8-9)でも「鍋」と「糞」を書き分けていたことが分かる。註4参照。

31) eamanpoki cuy「その梁の下(?)を刺す」だろうか。

32) 「アス」は -asi(-ahsi) としたが、複数標識だとすると上の者とその妻の二人とも糞に埋まったということだろう。

33) 「§23. 兄 (14) hoski-ramu [hos-ki-ra-mu ほシキラム] 《ニイトイ, シラウラ》【常】兄。(cf. noka-ramu に対する)。[hoski (先の)+ramu(子?)]」(【人間編】502)。註5, 16 参照。

34) 「inonita」(【知里フィールド(6)】122)「イノニタハ」(【同】126)。

35) 動詞の後にコピュラが来ることはないので「アイヌ・モシリ」5号の語りの inonitah manu「祈ったとさ」、もしくは inonitah ki manu「祈りをしたとさ」が適切だと思われる。

36) スが si であるとするれば、この部分も si(i)mawmaw だった可能性がある。浅井タケ氏の類話では「sii maw ‘asin」(村崎編訳 2001:202) とあり、どちらも si「糞」と関連があると思われる。浅井タケ氏の物語だと、この言葉を唱えたあと、maw「風」が出て、波が立ち、糞を全て流し出している。

37) この部分は「アイヌ・モシリ」14号では平仮名で書かれており、節をつけて語られていたのだろう。

スーマウマウ スーマウマウ モシリ クルカ エラピス・ラピス」

- 12002 イノニイタク ネヤス イムイキ イサン。
イノニイタク ネヤス イムイキ イサン。
[inonitah] neya [si] [emuyke] isan.
(と) 祈ると、その糞はすべてなくなった。

- 36106 ホシキラム シモエカ ヤシカイ³⁸⁾ ネマヌ。
[hoskiramu [simoye] ka [easkay] ne manu.]
兄 (= 上の者) は動くことができたとき。

- 12003 昭和十一・二月 雪の夜³⁹⁾
(昭和十二年二月 ウパシ・アント)
昭和十二年二月 upas an⁴⁰⁾ to
昭和十二年二月 雪の降る (?) 日

謝辞

テキストの転載に当たっては釧路アイヌ文化懇話会会長の山本悦也氏にご快諾いただきました。深く感謝いたします。査読の方のご教示にも深くお礼を申し上げます。筆録者の山本氏、語り手の木村氏をはじめとして記録を残された方々に敬意を表します。

出典略称

- 【釧路語彙】：アイヌ語釧路方言語彙編集委員会 (2004)
【久保寺辞典】：北海道教育庁生涯学習部生涯学習部文化課編 (2007)
【知里フィールド (6)】：北海道教育庁生涯学習部生涯学習推進局文化・スポーツ課・編 (2007)
【動物編】：知里 (1976[1962])
【人間編】：知里 (1975[1954])
【ロシア語】：Добротворский, М. М. (1875) ; 日本語訳は寺田・安田訳 (2016) を利用した。

参考文献

- アイヌ語釧路方言語彙編集委員会 (2004) 『アイヌ語釧路方言辞典語彙 附・「アイヌ・モシリ」 山本多助作品集』 釧路アイヌ語の会。
稲田浩二・小澤俊夫編 (1989) 『日本昔話通観 第1巻 北海道 (アイヌ民族) 』 同朋社。
浦田遊編 (1998) 『アイヌ・モシリ — 幻のアイヌ語誌復刊』 釧路アイヌ文化懇話会。

38) easkay が期待されるが、ヤシカイとある。この語は山本氏の筆録に多く出現する (【釧路語彙】219)。なお、yaskay の後のコピュラ ne はない方が文法的に解釈がしやすくなる。

39) 「アイヌ・モシリ」14 では「昭和十二年二月 ウパシ・アント」とあり、採録年が1年ずれている。

40) 「雪が降る」は山本多助氏をふくめた釧路地方の話者も upas as と表現するようである (【釧路語彙】70)。upas an という言い方が「ン」と「シ」の形が似ているために起こった誤植の可能性もある。

- 『エカシとフチ』編集委員会 (1983) 『エカシとフチ 資料編 文献上のエカシとフチ』札幌テレビ放送株式会社。
- 北原次郎太編 (2013~2014) 『アイヌ・先住民アーカイヴプロジェクト報告書 和田文治郎 樺太アイヌ 説話集』1, 2, 北海道大学アイヌ・先住民研究センター。
- 金田一京助 (1913) 「樺太アイヌ語彙」山邊安之助著・金田一京助編『あいぬ物語 附あいぬ語大要及語彙』: 33-60, 博文館。
- 金田一京助・荒木田家壽 (1943) 『アイヌ童話集』第一藝文社。
- 阪口諒 (近刊) 「山本多助筆録『サコロベ』のテキストとその言語的特徴」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』20, 千葉大学ユーラシア言語文化論講座。
- 志賀雪湖 (2004) 「おなかの小鳥」日本民話の会・外国民話研究会編訳『世界の鳥の民話』: 224-225, 三弥井書店。
- 『四宅ヤエの伝承』刊行会編 (2011) 『四宅ヤエの伝承 韻文編 1』四宅ヤエの伝承刊行会。
- 田村将人 (2009) 「山本多助氏のノートに含まれるアイヌ語樺太方言語彙」津曲敏郎編『サハリンの言語世界』: 145-155, 北海道大学大学院文学研究科。
- 知里真志保 (1973a~c) 『知里真志保著作集』1~3, 平凡社。
- (1975[1954]) 『知里真志保著作集 別巻 II 分類アイヌ語辞典 人間編』平凡社。
- (1976[1962]) 『知里真志保著作集 別巻 I 分類アイヌ語辞典 植物・動物編』平凡社。
- 寺田吉孝・安田節彦訳 (2016) 「M.M. ドプロトウヴォールスキーのアイヌ語・ロシア語辞典 (19)」『北海学園大学学術論集』169: 40-181, 北海学園大学。
- 蓮池悦子 (1987) 「知里ノート (道立図書館蔵) の中の金成ノート目録」『アイヌ文化』12: 39-55, アイヌ無形文化伝承保存会。
- 服部四郎編 (1964) 『アイヌ語方言辞典』岩波書店。
- 北海道教育庁生涯学習部文化課編 (1996) 『平成7年度アイヌ民俗文化財調査報告書 (アイヌ民俗調査X V)』北海道教育委員会。
- (2003) 『平成14年度 アイヌ民俗文化財調査報告書 (アイヌ生活技術伝承実態調査IV)』北海道教育委員会。
- (2004) 『知里真志保フィールドノート (3)』北海道教育委員会。
- (2007) 『平成3年度 久保寺逸彦 アイヌ語収録ノート調査報告書 (久保寺逸彦編 アイヌ語・日本語辞典稿)』北海道教育委員会。
- 北海道教育庁生涯学習部生涯学習推進局文化・スポーツ課・編 (2007) 『知里真志保フィールドノート (6)』北海道教育委員会。
- 松本成美編 (2005) 『久摺』特集号、釧路アイヌ文化懇話会。
- 村崎恭子編訳 (2001) 『浅井タケ口述 樺太アイヌの昔話』草風館。
- 山本多助 (1973) 『言葉の霊 イタク カシカムイ』ヤイユーカラアイヌ民族学会。
- 吉田巖 (1911) 「星に関するアイヌの傳説」『人類學雑誌』27(7): 396-401, 第一書房。
- (1955) 『帯広社会教育叢書 No.1 愛郷譚叢<東北海道アイヌ古事風土記資料>』帯広市教育委員会。
- (1957) 『帯広社会教育叢書 No.3 愛郷譚叢<アイヌ古事風土記資料>』帯広市教育委員会。
- Добротворский, М. М. (1875) *Аинско-Русский Словарь*. Казань.

Piłsudski, B (1990) *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore. vol. 2*, Poznań.

Sato, T (1985) The First Person Objective Affix IN- in the East Coast Dialects of Sakhalin Ainu. In: Executive Committee of the International Symposium (ed.) *Proceedings of the International Symposium on B. Pilsudski's Phonographic Records and the Ainu Culture*: 157-167, Hokkaido University.

Ainu folk tale in the Sakhalin Dialect by Tasuke Yamamoto (1):

Karafuto ubebekere (Opke newa ikoro upepekere)

Ryo SAKAGUCHI

(Master's Course Student at Graduate School of Humanities and Social Sciences,
Chiba University)

This Sakhalin Ainu folk tale is extracted from *Ainu-mosir*, an Ainu language magazine published in the years 1957-1965, in which Tasuke Yamamoto was the main writer. During his stay in Sakhalin in February 1937 Tasuke Yamamoto (1904~1993), who was born in Harutori, Hokkaido, recorded this tale using the Japanese *katakana* script when it was recited by Usarusmah Kimura (?-1953?), born in Aihama, Sakhalin. Yamamoto's work deserves recognition as an effort to preserve Ainu culture by Ainu people themselves. Folk tales of this type are well known both among Ainu and in Japan (cf. *Tori-nomi jī* or *The old man who swallowed birds*). The Tale from Karafuto, which was never published as a complete translation into Japanese, is given here in its original *katakana* transcription and in the Roman alphabet transcription, and is accompanied by Japanese translation.

Karafuto ubebekere (Opke newa ikoro upepekere)

Tale from Karafuto (Tale of the breaking wind and the treasure)

There were *Pankankuh*, the man living on the lower reaches of the river and *Penkankuh*, the man living on the upper reaches of the river. One day *Pankankuh* went into the mountain to cut wood. He killed a sparrow and swallowed it. He went back home, where he broke wind, making the sounds *kanitonto kanitonto sipecarara puyuyuhpuh*, and he dropped treasure. The room became filled with the treasure. Then, he invited *Penkankuh* and his wife to come to see the treasure. When *Penkankuh* heard that *Pankankuh* had become rich, he said: "This is what I wanted to do, abominable *Pankankuh*! You have forestalled me. Bad *Pankankuh*! " Saying these words he got angry, and only his wife went to *Pankankuh's* house to see the treasure.

The next day, *Penkankuh* went into the mountain to cut wood and swallowed a large bird. Then, he broke wind, making the sounds: "*Kunkumi kunkumi cinituy mukara noyhun mukara tonparara puh*." But he only dropped feces, and his house became filled with his feces. After it happened *Pankankuh* came to *Penkankuh's* house and prayed: "*Siimawmaw siimawmaw atuy soo kuruka erapisu rapisu*." All the feces vanished.

